

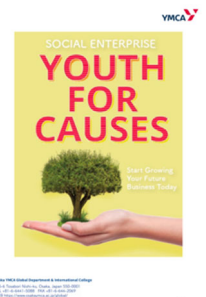
「Youth for Causes

Y Start Social Enterprise Student Team Project 学生チームスタートアップソーシャルビジネス」

大阪 YMCA 国際専門学校 & グローバル事業推進室

今回、大阪 YMCA 国際専門学校は、全国 YMCA ユースチャレンジプログラムに参加する機会を得ました。ビジネス学科の 38 名の学生は、1 年を通し多くのチャレンジを経験し、個人的にも専門性の面においても成長をとげました。学生たちが直面したチャレンジは、コミュニケーション、ソーシャルビジネスの企画、選択した慈善団体との提携、最終的なプレゼンテーションと多岐にわたりました。

本プロジェクトは、Youth for Causes (YFC) プロジェクトのもと、大阪 YMCA グローバル事業推進室の協力を受け、2019-2020 年度の 4 月（フェーズ 1）から 2 月（フェーズ 11）にわたり行われました。学生および 3 名の教員（パトリック・クワン、エメリー・京子、デブラ・スキタ）は、ソーシャル・エンタープライズ・ハンドブック（英語版・日本語版）を手引書として使用しました。予想どおり、プロジェクトは最初から最後まで完全に円滑に、また問題なく進んだわけではありません。色々な課程において、各チームがさまざまなチャレンジ、課題、困難に直面しましたが、このことがプロジェクトに参加した各個人にとって貴重な経験となり、人間としての成長につながるものであったことを望みます。



本プロジェクトの概要として、社会的ニーズ、ビジネススキル、キャラクター形成の 3 つの主要な分野を強調したいと思います。

社会的ニーズ：

すべての学生が最初に直面した課題は、持続可能な開発目標（SDGs）を選択するという事です。多くの学生にとって、社会問題を検討し、研究するのは初めての経験でしたが、出会い（みつける）段階でのこの経験は、取りまく社会や世界に目を開き、それらに気づくということに役立ちました。



次に、学生は社会的原因について話し合い、原因を特定し、選択した SDGs ごとにチームを結成しました。たとえば、何人かの学生は、質の高い教育（SDG #4）と環境（SDG #15）の必要性に対処したいと考え、チームを結成しました。彼らはすぐにブレインストーミングを開始し、教育と環境の両方に影響を与える製品を検討し始めました。

本校のビジネス学科生は、民族的背景や学歴等の幅が広く、出身国は 12 か国（日本、韓国、中国、台湾、香港、ベトナム、モンゴル、マレーシア、インドネシア、カンボジア、ネパール、バングラデシュ）にわたります。チームを結成した後、学生たちは新しい環境でのコミュニケーションという、もう一つの課題に直面しました。チームメンバーの間で使用される主な言語は英語と日本語ですが、それぞれのチームが、コミュニケーションのために独自のスタイルと形態を見つけました。コミュニケーションが途絶え誤解が生じたこともありましたが、各チームは何らかの形でコミュニケーションの壁を乗り越える方法を見つけました。

2019年7月23日、*The Zero Way* (ゼロウェイ)を実際に立ち上げた社会起業家、ビアンカ・ヤマグチ氏が、学生に話をするために本校を訪れました。各チームは自分たちのアイデアをビアンカ氏に売り込む機会を与えられました。そして、彼女からソーシャルビジネスモデルをより改善していくのに役立つ、貴重なフィードバックを受けました。メンターからのこの訪問は、生徒のモチベーションレベルを高めるのに役立ちました。ビアンカ氏は学生に、社会的問題に対処し、社会的目標（彼らが選択した SDG）を達成するためには、より創造的な方法を考えなければならないと強調しました。



The Zero Way
Live. Let Live. Love. Laugh. Learn. Leave a Legacy

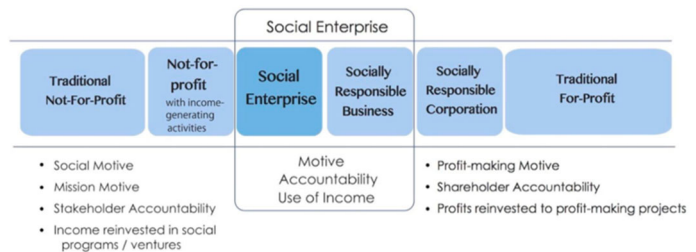
各チームは、明確なビジネスモデルを展開し、製品またはサービスを決定するにつれて、**みつかる**段階から**つながる**段階へと徐々に進んでいきました。最大の課題は、特定の社会問題に対処し、かつ利益を上げるソーシャルビジネスの立案でした。

次の**つながる**段階は、チームが支援する慈善団体または大義理念のいずれかを見つけ、それらと**つながる**ことです。そして、慈善団体に寄付する、社会的な大義に使用するための利益分配を、チームごとに決定する必要がありました。たとえば、シード・エコペンシルチームは、カンボジアの子供たちのために、カンボジア留学生協会・関西 (KSAK) に利益を寄付することを選択しました。

ビジネススキル：

学生はビジネス理論を実行に移す機会も得ました。各チームは、利益を生み出すアプローチと根本的な社会的動機を組み合わせ、独自のソーシャルビジネスを作り上げなければなりません。チームごとに、会社名、ビジョン、ロゴ、製品という独自のアイデンティティを作成。この段階において、すべてのチームが「私たちは誰か」、さらに基本的な「このチーム内で私は誰か」という問いについて考えることになりました。いくつかのチームにおいては、チームメンバーが会社のアイデンティティ、ビジョン、ビジネスモデル、および製品について最終的に合意するまで、決定⇒変更⇒決定⇒変更というサイクルを、継続して行いました。

Social Enterprise Spectrum



次に各チームが取り組んだのは、リサーチや開発、会計からマーケティングに至るまで、メンバー各自の役割を決定することとした。この段階で、学生たちに自分の長所と短所とともに、自分の能力をチェックする機会が与えられました。そしてチーム内での連絡方法、情報を共有するための創造的な方法を確認しました。



税関と輸出入のスペシャリストである木村弥生先生が、2019年5月28日、海外での製品製造の法的側面について学生に講義を行いました。複数のチームが、製品を企画し、その製造を低コストの海外で行うことを決定していました。そして大阪（主に学内キャンパス）で販売するために、製品を輸入することを提案しました。木村先生は、正しい法的文書の作成と適切な税関手続きの重要性について説明しました。そして特に2つのチームに対し、彼らの製品に関し助言しました。たとえば、シード・エコペンシルチームは、日本の関税法で許容される種子の種類について調査し、地元の大阪税関に連絡する必要がありました。その後、シードチームは製品を変更し、野菜ではなく花の種を選択しました。このようにして、学生は、ビジネスの法的側面についての知識と、適切な文書を取得することの重要性を学びました。



その後、各チームは事業立ち上げ資金を獲得するために、次の段階に進みました。Y-Bankers（グローバル事業推進室 ドミニク・パングラッシオ氏担当）は、ビジネスモデルを発表する各チームと会合を持ちました。この段階においては、学生がビジネス環境で実際の交渉を体験することに重点が置かれました。各チームは、予算、見積もり経費、予想利益を提示し、事業立ち上げ資金の最終的な要求額を提示する必要があります。Yバンカーは、選択したSDGに対しチームが目指す社会的影響と努力についても質問しました。より詳細なアイデアと提案が与えられ、チームメンバーは新しい課題、すなわちソーシャルビジネスモデルに修正を加え、改善しなければなりません。全ての修正を完了した後、各チームはY-Bank ローンを受けるための用紙に記入し、製品注文・購入のためのスタートアップ資金を受領しました。



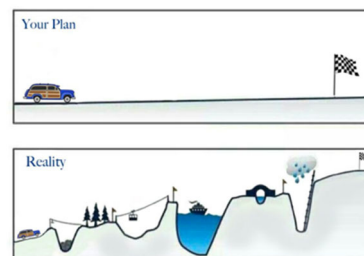
ビジネスライセンスとディレクターからの承認を得ることが、次に到達すべき目標です。望月温ディレクターは各チームと会い、その提案に耳を傾け、社会的企業のビジョンと目標について質問しました。その後、各チームのリーダーは、事業開始日と製品販売を提示しました。許可が与えられると、チームはマーケティングや販売活動を進めていきました。



キャラクター形成：

私たちのプロジェクトのもう一つの成果は、キャラクター形成でした。このプロジェクトベース・コースにおいて、学生が実践的なスキルを習得するだけでなく、個人的な成長につながる困難を経験することができれば、と考えていました。簡単に言えば、学生たちがハードルに直面し、最終的にそれぞれのハードルを克服する方法を見つけてほしいと思いました。それに加え、学生たちがそれぞれの障害を他のメンバーと一緒に克服してくれることを望んでいました。

「Your Plan – Reality」のイラストは、各チームが本プロジェクトの間に直面した浮き沈みを明確に示しています。ここでの課題は、物事がスムーズに進まなかったり、計画どおりに進まなかった場合でも、モチベーションレベルを上げておくことでした。形成されるキャラクター特性は、チームワーク、リーダーシップ、批判的思考、問題解決、効果的なコミュニケーション、辛抱強さ、忍耐、順応力、信頼性、遂行です。当然のことながら、各学生は、過程が進むごとに現れたさまざまな障害や事態に対し、異なる反応を示しました。



おそらく、教育者として最も重要な責任の一つは、私たちの学生のキャラクター形成を支援することでしょう。YMCAは、変革と改善（よくなっていく）という教育哲学を掲げています。個々の学生に変革が生じただけでなく、社会に対しても何らかの変革的影響を与えることができたと思っています。

ユースチャレンジへの参加は、「育成」の経験であると同時に、やりがいのあるものでした。

「1人の子供を育てるには村全体が必要」ということわざは、大阪YMCAで行われる共同の取り組み努力をうまく表しています。本プロジェクトが成功し完了したのは、学生チーム、カレッジスタッフ、グローバル推進室、および他学科の諸先生からの支援や協力、努力があったからだと思っています。

この新しいプログラムを始める機会を頂けたこと、そして全国YMCA委員会から頂戴した、財政的支援および励ましに心から感謝しています。私たちの「村」とYMCAコミュニティは、プロジェクトベースのソーシャル・エンタープライズYFCコースを活用し、ユースチャレンジの実施に向けて引き続き取り組んでまいります。

2020年2月14日
ビジネス学科の卒業公演



望月温ディレクターからのコメント：

学生たちは、たった数名のプロジェクトチームでも
「意見がまとまらないこと」「能力がバラバラであること」
を知り、小さな衝突を繰り返します。
その過程の中で、
「他者は自分と違うこと」を互いに認め合い、
「ひとりひとりには良質な個性があること」を理解していきます。
時には「誰も頼らず自分ひとりの方が簡単だ」と思うこともありますが、
自分の弱点をメンバーに助けてもらい、
自分がチームに貢献できることを考えることで、
「自分ひとりだけでは、到達できない成果（達成感）があること」に気付きます。

教師からのコメント：

パトリック・ワン教師：

ソーシャルエンタープライズのクラスは、学生にとって良いチャレンジとなりました。
それは99%の学生にとって、ソーシャルビジネスとは何か、そして社会にどんな肯定的影響を
与えることができるのかを、始めて考える機会となったからです。

京子・エミリー教師：

ソーシャルエンタープライズのクラスは、学生にとって時には困難でチャレンジを要するもので
あったかもしれませんが、この経験は将来必ず役に立つと確信しています。私個人としても、色々

なことを学習した有意義な一年となりました。学生たちが最後に見せてくれた一体感と満足した表情が、印象に残っています。

デブラ・スキタ教師：

この新しいソーシャルエンタープライズクラスは、やりがいがあると同時に、達成感を感じられたクラスでした。途中で多くのハードルと困難に遭遇しましたが、努力をしたかいたがあったと思います。一番嬉しかったのは、学生が一緒になって自分たちの目標を達成し、「やった！」と言うのを目にした時です。

学生代表からのコメント：

私たちが学んできたことは、ビジネスというのはお金のためだけではなく、ちゃんと地球に優しいか、健康にいいのか、将来につながっていくのか、それら全てを考えて社会的に責任を持っていくのが本当のビジネスだと思います。

グローバル事業推進室からのコメント：

ユースフォーコースズソーシャルエンタープライズプログラムは、グローバル事業推進室の使命である若くて、熱心なコミュニティ志向の地球市民の育成と密接に連携しています。ソーシャルエンタープライズコンテンツを大阪YMCA国際ビジネス学科のカリキュラムに統合することにより、次のようなことを推進しています。

- ・ YMCAの4つの価値観である、思いやり、誠実さ、尊敬心、責任感と若者のエンパワーメントの原則を、学生が信じている、または挑戦している社会的または環境的な課題に結びつける。
- ・ 若者向けの革新的なプログラムを通じて、国連が提唱する2030年までに持続可能な開発目標に取り組む大阪YMCAの役割を拡大する
- ・ 実践的な設定の中で理論的知識を適用することで、若者がプロジェクトを自分の事として捉え、チャレンジすることを支援する

また、このプログラムは、大阪YMCAグローバル推進室の事業の中核をなす責任の一つである部署間のコラボレーションモデルとして設計されているので重要です。プログラムの持続可能性に貢献するための追加の資金源の獲得は、2019年に特定の目標と目的を達成するために不可欠でした。私たちは日本YMCA同盟から提供された支援に感謝しています。

ドミニク パングラッシオ

大阪YMCA グローバル事業推進室 室長補佐

3. 今後、ユースチャレンジを希望する人へのアドバイス

インストラクター/ファシリテーター：

ユースチャレンジへの参加に関心のある将来のチームは、実際に開始する前にいくつかの点を考慮する必要があります。まず、目標（大小）を設定し、それらの目標を達成する方法について計画を立てます。第二に、インストラクター/ファシリテーターは、他のスタッフメンバーのチームを準備して、学生チームのサポートを支援する必要があります。第三に、インストラクター/ファシリテーターは、学生のモチベーションとチームの士気を高める方法を準備する必要があります。たとえば、生徒が課題を達成したり、小さな目標を達成したりすると、生徒を称賛します。最後に、インストラクター/ファシリテーターは、学生プロジェクトが当初の計画とは違った形になることに留意する必要があります。各学生チームはそれぞれ違いがあるため、特定の各チームのスタイル、ペース、ニーズに合わせてカスタマイズできるようにすることが重要です。

青年/学生/参加者：

ユースチャレンジは、新しくエキサイティングなものに挑戦する絶好の機会です！自信をつけたり、他の人と交流したり、プロジェクトで一生懸命働いたり、そして最も重要なことは、コミュニティ/社会/世界に変化をもたらすあなたの声を見つけるための素晴らしい方法です。プロセスは山あり谷ありですが、目標から目をはなさず、一歩ずつ前進することを忘れないでください！ You can do it!!!